

指導資料

鹿児島県総合教育センター

令和元年10月発行

国語 第147号

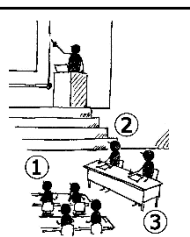
対象
校種小学校 中学校 義務教育学校
特別支援学校日常生活と結び付く「書くための読む力」を育成する授業改善
—評価問題(平成31年度全国学力・学習状況調査問題)の活用を通して—

これまで、鹿児島県の児童は複数の情報を結び付けて適切にまとめられない、答えが一つではない問題について自分の考えを表現できないなど、「書くこと」に関する課題を抱えてきた。本資料では、日常生活で生きて働く書く力を育成するため、「書くための読む力」を身に付けさせる視点、全国学力・学習状況調査等の評価問題を活用する視点からの授業改善策を提案する。

1 はじめに

問 講演会で、最も熱心に講師の話を聴いているのは次の①～③の誰でしょう。

- ① 聴衆
② 司会者
③ 講師へ御礼を述べる方



私の考える正解は、③である。もちろん、①や②の方も熱心に聴いていると思うが、③の方は、講演会の後すぐに生かさなければならないという目的が明確だからである。このように、目的が明確であると、自然と熱心に取り組むことができるということがよくある。

平成31年度の全国学力・学習状況調査では、鹿児島県の小学校国語は全国平均を上回る結果であったが、依然として「書くこと」に関する課題が顕著に現れた結果となった(正答率が全国平均よりも-3.3ポイント)。特に「事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること」について課題があった。原因として考えられるのは、書く力が身に付いていない児童が多いということである。これは、書く活動を授業に位置付けているものの、十分実効性のある活動になっていない、年間を通じた書く活動が圧倒的に少ないなど、「書くこと」に関する指導不足が起因していると考えられる。

しかし、「書くこと」のみに課題があるとは言いきれない。私たちは日常生活において、読んだり、聴いたりして様々な情報をインプットし、

それらを基に自分の考えを組み立て、書いたり話したりするなどのアウトプットをしている。つまり、原因は「書くこと」だけでなく、「読むこと」に関する指導にもあると考えられるのである。さらに言えば、書くという目的が明確化された「読むこと」の指導が十分なされていないと考えられるのである。

また、今回の調査では、これまで以上に日常生活の場面を取り上げた設問が多かった。

出題形式は従来の「主として『知識』に関する問題(A問題)」と「主として『活用』に関する問題(B問題)」を一体化した構成となり、「知識」を基に思考力、判断力、表現力を活用させる構成となっている。これは、日常生活における問題解決の仕方であり、国語の授業の枠を超えて、日常生活により近い状況を想定した出題になったと言える。つまり、このような評価問題を授業で活用することで、授業自体が日常生活と有機的に結び付き、生きて働く書く力を育成しやすくなると考えられる。

そこで、本指導資料では、次の二点に着目した授業改善策を提案する。

① 「書くための読む力」を身に付けさせる

「書くこと」だけでなく、その前提となる「読むこと」に関する指導にも注力する。

② 評価問題を活用する

日常生活で生きて働く書く力を育むために、教科書教材に固執せずに、全国学力・学習調査等の評価問題や日常生活の事象を有機的に結び付ける。

2 「書くための読む力」を身に付けさせる

児童が問題解決をする際、書くことを、下のような①～③の過程で考えることができる。

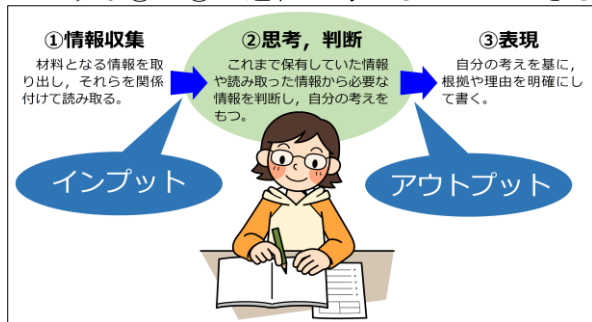


図 書くことの①～③の過程

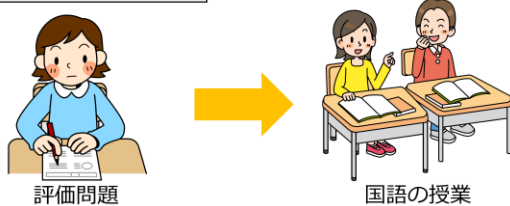
①の過程は、読む力を駆使する過程であると言える。そのため、この過程における「読むこと」に関する指導が、②③の「書くこと」に関する指導に生かすことができると考える。

つまり、「書くための読む力」を身に付けさせるには、重点的に身に付けさせたい書く力と、それに結びつく読む力の育成を同時にねらうことが肝要であると言える。

3 評価問題を活用する

教科書教材の学習で完結しがちだった国語の授業と日常生活とを有機的に結び付ける授業スタイルは、例えば、次のような四つのパターンが考えられる。

授業前コネクト型



評価問題を解く時間を、単元や1単位時間の導入に位置付ける

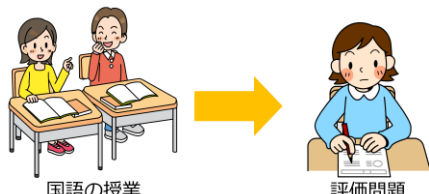
<長所>

- ・ 評価問題で扱う日常生活の事象と授業がつながり、国語の学習の有用感を味わいやすい。
- ・ 児童一人一人の課題を把握することができ、より実態に寄り添った授業づくりができる。

<短所>

- ・ 時間がかかりやすく、1単位時間での実施が難しい。
- ・ 評価問題と授業をつなげるのが難しい。

授業後コネクト型



評価問題を解く時間を、単元や1単位時間の終末に位置付ける

<長所>

- ・ 授業で学んだ力を評価問題で確認できる。
- ・ 教科書教材から離れて、学んだことを振り返ることができる。
- ・ 補充指導や家庭学習指導と連動しやすい。

<短所>

- ・ 時間がかかり、1単位時間での実施が難しい。
- ・ 授業と評価問題をつなげるのが難しい。

サンドイッチ型



評価問題を解く時間を、単元や1単位時間の入り口と出口に位置付ける

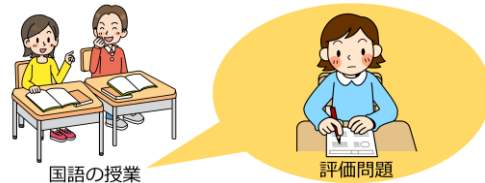
<長所>

- ・ 授業前及び授業後コネクト型のよさを生かした授業づくりができる。
- ・ 自分の課題が明確になり、授業に課題意識をもって臨みやすい。また、授業で身に付けた力の有用性を確認しやすい。
- ・ 授業と日常生活がつながりやすく、授業で身に付けた力を一般化しやすい。

<短所>

- ・ 評価問題を解けるようになるための授業になりやすい。
- ・ 時間がかかりやすく、1単位時間での実施が難しい。

活用取り込み型



評価問題を教材として活用し、単元や1単位時間内に位置付ける

<長所>

- ・ 評価問題を教材として授業に位置付けるので、1単位時間で完結する。
- ・ 児童個人の分析結果を直接指導に反映しやすい。

<短所>

- ・ 教材研究に時間と力量が必要となる。

なお、授業づくりを行う際、次の点に留意することで、評価問題を有効に活用できると考える。

- 授業と評価問題をつなげるために、身に付けさせたい力と評価問題で測る力を揃えた授業づくりをする。そのために、評価問題で取り上げている言語活動と単元全体で取り組む言語活動を揃える。
- 授業で身に付けさせたい力を明確にし、評価問題を目的ではなく、手段として用いる。
- 評価問題を取り入れた授業の各型を組み合わせることで、それぞれのメリットを生かした授業づくりができる。

4 授業実践例

(1) 単元について

【第5学年】調べたことを正確に報告しよう「みんなが過ごしやすい町へ」（光村5年）

本単元は、身の回りの工夫について調べ、報告する文章を作成する言語活動を通して、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することをねらいとしている。

(2) 評価問題について

【平成31年度 全国学力調査 設問1】調べたことを報告する文章を書く

本問では、生活の中で気になったことを調べ、報告するための文章を書く場面を設定している。高橋さんの報告文の全体が掲載されているので、自分の考えが伝わるような書き方を学ばせる際、筆者の目的や意図を叙述と結び付けて考えさせやすい。

1 はじめに

高橋さんの学級では、生活の中で気になったことを調べ、友達に報告することになりました。高橋さんは、公衆電話について調べています。次は、高橋さんが書いてる「報告する文章」です。これをよく読んで、あとの問いに答えましょう。

【報告する文章】

公衆電話について

先日出したときに、家に電話をかけようと思った店に行くと、あつたはずの公衆電話がなくなっていました。こまめに調べてみました。また、よく行く公園の公衆電話も、いつの間にかなくなっていました。わたしは、公衆電話の数が減っているのではないかと、町の公衆電話の数を調べてみることにしました。それをまとめたものが（資料1）です。平成二十年度から二十九年度までの十年間で、約半分に減っていることが分かりました。そこで、公衆電話は、わたしたちにとって必要がなくなってしまうのかどうか調べてみることにしました。

2 調査の内容と結果

（1）公衆電話はどのようなときに必要なのか

多くの人がけいたいの電話を持つ中で、公衆電話が必要とされているのかどうかを調べてみることにしました。そこで、地いきの人三十人を調査のたしとして、公衆電話は必要かどうかを聞いたところ、ほとんどの人が必要だと回答しました。その理由をまとめたものが（資料2）です。「けいたいの電話をわすれたときに必要」「けいたいの電話の電池が切れたときに必要」などの回答がありました。このことから、公衆電話は、主にけいたいの電話を使うことができないときに必要とされているということが分かりました。（2）公衆電話にはどのような使い方がありのか

公衆電話について書かれた資料を調べてみると、公衆電話には、次のような使い方がありました。・警察署（110番）や消防署（119番）には、硬貨やテレホンカードがなくても通報することができ。・停電のときでも、硬貨を使って通話することができ。・電話が混み合っているときでも、優先的につながりやすい。このように、公衆電話は、きん急のときにも使うことができるということが分かりました。（3）公衆電話はどのような場所にあるのか

公衆電話を必要とときに使うことができるようにするためには、どのような場所に設置されているのかを前もって知っておくことが大切だと思ったので、わたしは、公衆電話の設置場所を確かめてみることにしました。実際に町を歩いてまわったものが（資料3）です。この資料から、公衆電話は、主に病院や学校、駅などの多くの人が集まる場所にあるということが分かりました。調査の結果から、公衆電話は、わたしたちにとって必要がなくなってしまうのではないかと考えました。なぜなら、

（A）

また、公衆電話を使いたいときには、多くの人が集まる場所へ行けば見つけやすいのではないかと考えました。今回の調査を通して知ったことを、学級の友達にいかざらず多くの友達に伝え、公衆電話についてうかんしんをもってもらいたいと思います。

（資料1） 公衆電話設置台数の移り変わり

年度	台数
平成20年度	300
平成21年度	280
平成22年度	260
平成23年度	240
平成24年度	220
平成25年度	200
平成26年度	180
平成27年度	160
平成28年度	140
平成29年度	120

（資料2） 公衆電話が必要な理由のまとめ（複数回答）

けいたいの電話をわすれたときに必要	22人
けいたいの電話の電池が切れたときに必要	12人
けいたいの電話の使用が禁止されている場所にいるときに必要	5人
けいたいの電話の電波がとどかない場所にいるときに必要	4人
けいたいの電話や家の電話がつながりにくいときに必要	3人
その他	5人

（資料3） 公衆電話の設置場所を示した地図

設問三について

この設問は、目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書くことができるかどうかをみる問題である。

（A）の書き出しは「なぜなら」なので、公衆電話が必要な理由を拾い出せばよいことが分かる。その際、（A）の前後の文に着目して、どんな内容が適しているか考えなければならない。

- ・ 前の文の「調査の結果から」という書き出しから、「2 調査の内容と結果」の（1）～（3）を受けて書けばよいと予想できる。
- ・ 後の文は公衆電話のある場所についての内容が書かれているので、（3）のことは含まれず、条件に挙げられている内容であると分かる。

これらの設問の特性から、活用取り込み型で評価問題を授業に活用することにしました。その際、問題文をモデルとして提示して報告する文章の書き方の工夫を見付けさせました。また、授業後コネクト型として、類似の評価問題を自作し、学んだことを確認する学習活動を位置付けることにしました。



調査の結果から、公衆電話は、わたしたちにとって必要がなくなってしまうわけではないと考えました。

なぜなら、

70字

40字

※左の縦線は下書き用紙で、使っても使わなくてもかまいません。解答は、解答用紙に書きましょう。

- （条件）
- 「2 調査の内容と結果」の（1）と（2）の両方から言葉や文を取り上げて書くこと。
 - 「報告する文章」にふさわしい表現で書くこと。
 - 書き出しの言葉に続けて、四十文字以上、七十文字以内にとめて書くこと。なお、書き出しの言葉は字数にふくむ。

三 高橋さんは、「3 調査の結果をもとに考えたこと」の（1）と（2）で分かったことをまとめて書いています。に「2 調査の内容と結果」の合わせて書きましょう。

(3) 単元の指導計画（全 11 時間）

	主な学習活動	教師の具体的な働きかけ
つかむ・みとめ・おさ	1 単元の目標を設定する。 - 身の回りの工夫について意見交換する。 - 報告する文章を書きたいという意欲をもつ。 友達に伝える報告文は、どのように書けばよいのだろうか。 - 学習の見通しをもつ。	- 単元や教材への興味・関心を高めさせるために、身の回りの工夫について知っていることを話し合わせたり、例示をしたりする。 - 報告する文章を書く言語活動を遂行することが目標とならないように、共通教材で学んだ国語の力を活用して、自分の報告する文章を書くという単元の流れを確認させる。
しらべる・ふかめる	2～3 明確に伝えたいことを報告する文章の書き方を知る。 - 文章構成の仕方 - 図表の用い方  - 公衆電話を必要としている人が多く集まる場所に設置してあることを伝えるために、地図をいれたのだな。 - 調べた事実と対応させて自分の考えを述べると、読み手に伝わりやすくなるのだな。 4～8 報告する文章を書く。 - 題材の決定 - 調べ方の選定 - 文章構成の検討 つ書 なく が力 に	- 児童主体の問題解決的な学習にするために、評価問題を報告する文章のモデルとして活用し、伝えたいことを明確に伝えるための筆者の工夫を見付けさせる。 評価問題を活用する - 報告に説得力を持たせるための図表の用い方を理解させるために、叙述と図表をつなげて筆者の伝えたいことを考えさせる。 「書くための読む力」を身に付けさせる 「ウ 精査・解釈」の指導 - 筆者の文章構成や論の展開の工夫を理解させるために、モデル文の(A)にはどんな文が入るのか読み取らせる。 「書くための読む力」を身に付けさせる 「ア 構造と内容の把握」「ウ 精査・解釈」の指導
ふりかえる・いかす	9 学習のまとめをする。 「はじめに」「調査の内容と結果」「調査の結果を基に考えたこと」などのまとまりに分けて書く。 - 目的に応じて、図表を用いる。 - 自分の考えは調べたことと区別して書く。 10 報告する文章を互いに読み合う。 11 学んだことを確認する。	- 働かせた「言葉による見方・考え方」をメタ認知させるために、「分かったこと」、「できるようになったこと」だけでなく、その理由についてもしっかりと考えさせる。 - 本単元で身に付けた力を価値付け、日常生活等に生きて働かせるために、どのような場面で活用できそうか話し合わせる。 - 本単元で身に付けた国語の力を確認させるために、学習で取り上げた教材と類似の評価問題に取り組ませる。 評価問題を活用する ※ 別紙「単元終末で活用する評価問題」参照

5 おわりに

全国学力・学習状況調査で日常生活の場面を取り上げた設問が多いのは、そこに文部科学省のメッセージがあるからである。それは、これからの時代に求められる学びのイメージ、そして教師に目指してほしい授業のイメージをもってほしいというメッセージである。

国語とは、児童に国語の力を身に付けさせる教科である。しかし、ドリルの漢字は書けるが日記では使えない、教科書は読めるが新聞やレポート、テスト問題など日常生活の場面において、国語の力を生かせない児童が多いと言われて久しい。教室で行われてきた多くの国語の授業が児童の日常生活から乖離していないか、今一度振り返ってほしい。

私たち教師には、国語の授業だけで通用する力ではなく、国語以外の学習や日常生活、さらには児童の未来において通用する力を身

に付けさせる使命がある。調査問題を詳細に分析して日々の授業に生かす、「かごしま学力向上支援 Web システム」に掲載されている類似問題に取り組みさせるなど、調査問題が伝えようとしているメッセージを真摯に受け止め、目の前の児童のために、国語の授業改善にこれからも励んでほしい。

— 主な参考・引用文献 —

- 国立教育政策研究所教育課程研究センター『全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ～児童生徒への学習指導の改善・充実に向けて【小学校編】』平成 24 年
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』平成 29 年
- 鹿児島県教育委員会『全国学力・学習状況調査鹿児島県結果分析』平成 30 年
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター『平成 31 年度全国学力・学習状況調査解説資料』平成 31 年
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター『平成 31 年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイディア例』令和元年

(教科教育研修課 石川 雅仁)

問 石上さんの学級では、生活の中で気になったことを調べ、友達に報告することになりました。石上さんは、学校内で起こるけがについて調べています。次は、石上さんが書いている【報告する文章】です。これをよく読んで、あとの問いに答えましょう。

【報告する文章】

学校内で起こるけがを減らすために

石上 蒼太

1 調査のきっかけ

最近、学校生活の中で、とても気になっていることがあります。それは、学校の中でけがをした友達をよく見かけるようになったことです。わたしは心配になって保健室の先生に聞いてみたところ、確かにけがの件数は増えているとのことでした。

そこで、けがを減らし安全な学校生活を送るために、わたしは「学校内で起こるけが」について調べることにしました。

2 調査の内容と結果

(1) けがはどこで起こりやすいのか

けがは学校のどこで起こりやすいのかを、保健室の先生から見ていただいた資料で調べてみました。下の円グラフ〈資料1〉は、四月から十月までに起こったけがの発生場所とその件数の割合を表したものです。一位は校庭、二位は体育館、三位は教室で、この三つで全体の約八割をしめていました。

このことから、けがは、校庭、体育館、教室など、多くの人がいっしょに遊んだり学習したりする場所で起こりやすいということが分かりました。

(2) けがはいつ起こりやすいのか

次に、けがはいつ起こりやすいのかということについて、保健室の先生から見ていただいた資料で調べてみました。下の棒グラフ〈資料2〉は、今年の四月から十月までのけがが、いつ何件起こったのかを表したものです。休み時間のけがが最も多く、全体の約半数以上でした。

このことから、けがは、先生といっしょに活動する授業中よりも、多くの人が自由に行動するときに起こりやすいということが分かりました。

(3) けがはなぜ起こったのか

わたしは、校庭や体育館でのけが、休み時間のけががなぜ多いのか、その原因を調べてみようと思いました。そこで、校庭や体育館で休み時間にけがをしたことのある友達に、けがをした原因を聞いてみました。その結果をまとめたものが、下の表〈資料3〉です。「人とぶつかったから」や「飛んできたボールが当たったから」などの回答がありました。

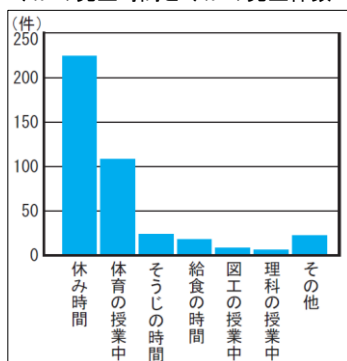
3 調査の結果をもとに考えたこと

調査の結果から、学校内で起こるけがを減らすためには、自分が注意することはもちろん、その場にいる人みんながおたがいに気をつけることが大切だと考えました。なぜなら、多くの人がいっしょに遊んだり学習したりする場所や時間にけがが起こりやすいからです。また、今回の調査を通して分かったことをもとに自分のこれまで学校生活を振り返るだけでなく、多くの友達にも伝え、けがを減らし安全な学校生活を送っていききたいと思います。

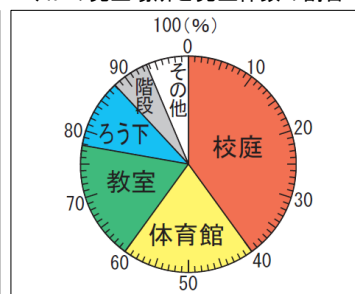
＜資料3＞
けがをした原因のまとめ(複数回答)

けがの発生の原因	人数(人)
人とぶつかったから	18
飛んできたボールが当たったから	12
遊ぶ道具を正しい方法で使っていなかったから	7
鉄ぼうやジャングルジムなどの遊具から手をすべらせて落ちたから	4
その他	8

＜資料2＞
けがの発生時間とけがの発生件数



＜資料1＞
けがの発生場所と発生件数の割合



○ 石上さんは「3 調査の結果をもとに考えたこと」の [] に「2 調査の内容と結果」で分かったことをまとめています。

[] に入る内容を、次の条件に合わせて書きましょう。

〈条件〉

- ・ 「2 調査の内容と結果」から言葉や文を取り上げて書くこと。
- ・ 【報告する文章】にふさわしい表現で書くこと。
- ・ 書き出しの言葉に続けて、二十字以上、四十字以内にまとめて書くこと。なお、書き出しの言葉は字数にふくむ。

※ 左の解答欄の◆から書きましょう。とちゅうで行を変えないで、続けて書きましょう。

			ま	なぜなら、多くの人がいっしょに遊んだり学習したりする場所や時間にけがが起こりやすいからです。
			た	
			、	
			◆	

正答例

自分以外の他の人の行動も関わって起こることが多いからです。

(二十九字)

解説

・ [] の書き出しは「また」なので、前の文に続けて、学校内でのけがを減らすための石上さんの考えの理由を書けばよいということが分かる。

・ さらに、前の文には、多くの人がいっしょに遊んだり学習したりする場所と時間に関することが書いてあるので、「2 調査の内容と結果」の(1)と(2)の結果を基に考えることが分かる。つまり、[] には「2 調査の内容と結果」の(3)の結果を基にまとめればよいことが分かる。

・ 「2 調査の内容と結果」の(3)から考えの理由を取り出す際、「このことから」という言葉に着目させ、その言葉の後に、結果から分かったことが書いてあるということが分かる。

※ この評価問題は、『平成三十一年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイデア例』(令和元年 国立教育政策研究所 教育課程研究センター)の三ページの授業実践アイデアを基に、筆者が作成したものである。